



Title	泉鏡花『沼夫人』論
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	阪大近代文学研究. 2005, 3, p. 13-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

泉鏡花『沼夫人』論

西尾 元伸

はじめに

医師である友人酒田を訪ねた小松原は、その夜、酒田の診察室の寝台を利用する。ところが、深夜に女性の声に呼ばれたように感じて目を覚ます。小松原には、かつてこの土地で出会った出征軍人の妻お房に呼ばれたようだと思われるが、同時に標本の白骨に襲われているようにも思われはじめ診察室を逃げ出す。そして、酒田に会い落ち着きを取り戻して、小松原は世間では心中とされている三年前の事故の顛末を、酒田に話して聞かせる。小松原が語り終ったところで酒田の妻も座に加わり、今度は酒田の妻が、診察室にあった白骨が沼から拾われてきた次第を話す。翌朝、沼へ戻すため小松原は白骨を持って酒田の家を出るが、その沼でお房の姿に出会う。そして、沼の上へとお房に導かれそうになるのだが、そのとき彼女の姿は消え、小松原は沼に落ちたところを酒田の車夫正吉に救われる。以上が、泉鏡花『沼夫人』（明

治四十一年六月）の粗筋である。

ここからも分かるように、本作品は小松原が友人の酒田を訪ねた一兩日の出来事を中心として描かれている。また、診察室に現れた人影、医師の酒田が廊下に見る女性の姿、診察室の三匹の鼯、蒼沼に現れ忽然と姿を消すお房など、怪異な事象が散りばめられている。

作品の性格は、これまでの研究においても、「現実と幻想の交差する妖艶なる趣きが見所」¹⁾、「『沼夫人』の幻怪も、平板、灰色の自然主義小説群を背景にして眺めれば異形、異彩」²⁾などと評されている。一方で、作品の分析は「水」の周辺に偏りがちである。中でも「水」と「眠り」「夢」など、小松原が内面に抱えた潜在意識との結びつきがとりあげられてきた³⁾。しかし考察は一部分に集中しがちで、作品の展開と構想に即して十分な検討がなされてきたとは言えない。本論は、従来あまり言及されて来なかった作品の素材や構想・展開についての検討を行い、一編の読解を目指す。それ

により、怪異の要因を内面との結びつきとは異なる側面から明らかにしていきたい。

一

鏡花作品において能がその素材となつたことは、夙に指摘されるところである。鏡花の家系からは能に親しむことが自然であつたと言われるし、いくつかの作品は明らかに能の詞章を引用する。本作品もまた、謡曲『杜若』を源泉とする作品であると考ええる。そのことを示唆するのは、蒼沼での小松原とお房の再会の場面に咲いた「杜若」の花である。

●こゝには鶯ばかりでなく、後れ咲か、返り花が、月に咲いたる風情を見よ、と紫の霧を吐いて、杜若が二三輪、ばつと花卉を向けた。其の山の端に月が出た。(二十七) 謡曲『杜若』では、三河の国八橋の沢辺で杜若を眺める旅僧の前に一人の女性が現れ、業平東下りの話を聞かせた後、僧を自らの庵へ招き入れる。そこで初冠、唐衣を身につけた女性は自らが杜若の精であることを明かす。庵へと導く以前、僧と杜若の精である女性との掛合いがある。

●女言新しき問ひごとかな、此八橋のここのみか、なをしも心の奥深き、カ、ル名所名所の道すがら、ウキ国々所は多けれ共、取わき心の末かけて、女思ひわたりし八橋のウキ三河の沢の杜若、女はるばる来ぬる旅をしぞ、ウキ

思ひの色を世に残して、女ぬしは昔になりひらなれ共、ウキ形見の花は、女今こゝに。(一)

杜若は「思ひの色を世に残し」た「形見」の花である。事故の日以来「杳として消息がない(十九)」お房との再会に、『杜若』での杜若の精の登場の場面を想像することは難しくない。

鏡花作品の中には、『風流線』(明治三十六年十月)、『杜若』(明治四十四年八月)などにも、謡曲『杜若』を意識した箇所がある。

●貴下は鼓ばかりでない、舞も謡もお上手ですから、杜若を拝見すれば、業平と思ひますし、松風を拝見すれば、須磨の海女と思ひました。(『風流線』、七十一)

●並んだ様子が、何うしても張子の巖から、花の精が黒塚について艶姿で躍出したやうに見える。(『杜若』、十二) また、『杜若』が登場するものは、他にも存在する。

●右から左へ、僅に瞳を動かすさへ、杜若咲く八ツ橋と、月の武蔵野ほどに趣が激変して、浦には白帆の鴉が舞ひ、沖を黒煙の龍が奔る。(『草迷宮』、一／明治四十一年一月)

●俾は寂然とした夏草塚の傍に、小さく見えて待つて居た。まだ葉ばかりの菖蒲杜若が隈々に自然と伸びて、荒れた此の広い境内は、宛然沼の乾いたのに似て居た。(『七宝の柱』／大正十年七月)

●腰衣のやうな幅広の前掛したのが、泥絵具だらけ、青や、紅や、其のまゝ転がつたら、楽書の獅子になりさうで、牡丹をこつてりと刷毛で彩る。緋を桃色に颯と流して、ほかす手際が鮮彩です。それから鯉の滝登り。八橋一面の杜若は、風呂屋へ進上の祝だらう。そんな比羅絵を、のし掛つて描いて居るのが、嬉しくて、面白くつて、絵具を解き溜めた大摺鉢へ、鞠子の宿ぢやないけれど、薯蕷汁となつて溶込むやうに……学校の帰途には其の軒下へ、いつまでも立つて見て居た事を思出した。『縷紅新草』、三／昭和十四年七月

●あの紫は、／お池の杜若。

一つ橋渡れ、／二つ橋渡れ。

三つ四つ五つ、／杜若の花も、／六つ七つ八つ橋。『あの紫は』／大正七年七月

鏡花作品において、菖蒲杜若は無造作に並列されているようでもあるが、実は杜若は「八ッ橋」と結びついていることが多いと理解できる。⁵⁵⁾「杜若」と「八ッ橋」とは『伊勢物語』の業平東下りに見られるモチーフであり、謡曲『杜若』は『伊勢物語』の古注に基づく作品である。『沼夫人』においては「八ッ橋」という語こそ現れていないが、その影響は次のような箇所からもしっかり知ることができる。

●線路へ出て、ずつと見ると、一面の浜田が何処となく、ゆさ／＼動いて、稲穂の分れ伏した処は幾ヶ所ともなし

に細流が蜘蛛手に走る。(十四)

●成程、漁師町を繞つたり、別荘の松原を廻つたり、七八筋に分れて、又一ツに成つて海へ濯ぐが、其処へ行くと、是でも幅が二十間ぐらゐ、山も賦になれば、船も歌へる、此の様子では汐が注さう。(十四)

「蜘蛛手」は謡曲『杜若』において、杜若の精が「八ッ橋」の様子を述べるために用いている。

●ワキ実々三河の国八橋の杜若は、古歌にも詠まれけるとなり、いづれの歌人の言の葉やらん、承度こそ候へ 女伊勢物語にいはいく、爰を八橋といひけるは、水行川の蜘蛛手なれば、橋を八渡せる也、其沢に杜若のいと面白く咲乱れたるを、ある人杜若といふ五文字を句の上に置きて、旅の心を詠めと言ひければ、唐衣きつつ馴れにしつましあれば、はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ、是在原の業平の、此杜若を詠みし歌なり。

このようにして見てくると、『沼夫人』の背後に謡曲『杜若』の存在をとらえることができる。そして、その撮取は小松原の三年前の叙述にも見られ、単に「杜若」の花が咲く場面にとどまらない。つまり、謡曲『杜若』の撮取は、作品全体の構想に関わるものと理解できるのである。

しかしながら、『沼夫人』全体の展開の中で「杜若」の開く場面を確認するとき、ひとつの疑問が残る。小松原は診察室にあつた標本の白骨こそ恋の対象であるお房の骨と思ひ込み、翌朝白骨を背負ひ蒼沼へ向かう。無事に骨を沼に沈めたものの、その場から立ち去ることができない。そのとき、沼の汀から見た光景の中に伸びていたのは、「菖蒲」の葉だつた。これが「杜若」ではなく「菖蒲」だつたのはどうしてだろうか、という疑問である。

●水の面は秋の空、汀に蘆の根が透く廻りは、薄濁りに濁つて、二葉三葉折れながら葉ばかりの菖蒲の伸びた蔭は、どんよりと白い。木の葉も、ばらばらと散り浮いて、ぬら／＼と蓴菜の蔓が、水筋を這ひ廻る（二十三）

『沼夫人』には、鏡花作の俳句「わが恋は人とする沼の花菖蒲」と共通した情景を描いているという指摘がある。そして、この句が、古今集中の読み人知らずの和歌「時鳥なくや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」によつて発想された可能性も既に論じられている。この（あやめ）には恋の盲目が象徴されるが、本作品においても、「黑白」が分かれぬ闇から始まり、結末近いクライマックスには「菖蒲」が配置される展開となつてゐる。

●「あゝ、奥さん、」

と言つた自分の声に、ふと目が覚めると……室内は真暗で黑白が分かれぬ。寝てから大分の時が経つたらしくもあ

るし、つい今しがた現々したかとも思はれる。（二）

作品の冒頭部分は、小松原の思考をなぞりながら診察室の「黑白が分かれぬ」空間を提示していた。後に小松原は事故の日へ言を進めるとき、友人の酒田に向かつて「あの診察処のやうな真暗な夜（八）」と言う。診察室は記憶に残つた三年前の夜と同じように「真暗」であつたことが明らかになつていくのである。また小松原は実際に、「黑白」も分らない夜であつたとも述べている。

●水の音は次第々々に、或ひは嘲り、或は罵り、中にや独言を云ふのも交つて、人を憤り世を呪詛つた声で、見ろ、見ろ、汝等、水源の秘密を解せず、灌漑の恩を謝せず、名を知らず、水らしい水とも思はぬ此の細流の威力を見よと、流れ廻り、駆け繞つて、黑白も分ぬ真の闇夜を縦に蹂躪る。と時々どどと勝誇つて、躍上る氣勢がする。（十八）

そして、「黑白も分ぬ真の闇夜」以来の人妻への恋心を「言沢山の恋かも知れん（十九）」と告白するようになる。告白は友人酒田の言葉に従えば「惚気（九）」・「愚痴（同）」と受けとられかねない。「出征中の軍人の夫人（十八）」と二人で夜遅く人目を逃れるようにして起こした事故が、世間からは「余処の夫人を誘つて、心中を仕損つた（九）」と思われることは避けようもなかった。しかも小松原は「世間ぢや余計な風説をして居る（十八）」、つまり二人が男女の關係を

疑われていることまで知っていた。だから小松原は三年もの間恋心を心中深く秘してしまっていたのである。「黒白」も分らない診察室で聞いた婦の声は、その秘めた人妻への恋心を呼び起こし、自認させた。小松原が沼の汀に見た「菖蒲」には、呼び起こされた恋の盲目性が象徴的にあらわされていたのである。

しかし「菖蒲」の花は咲いていない。「葉ばかりの菖蒲」が伸びているだけである。ここで、先に挙げておいた「杜若」が開く場面では「葉ばかりでなく」となっていたという呼応関係に注目したい。診察室の闇の中、三年前の事故の日、ともに「黒白も分かぬ」闇夜の中に見たお房の姿が、蒼沼に浮かび上がり月の光の中に見えたとき、「杜若」が開いたのである。「黒白」から「菖蒲」へと（あやめ）を重ねあわせたものを、あえて「杜若」に替えて咲かせたことから、謡曲『杜若』からの摂取は明確である。

三

謡曲『杜若』からの摂取が構想に深く関わっているとすれば、小松原とお房の再会の場面には、死者との対話と、その後の成仏というイメージが引き継がれていると考えられる。

しかし、『沼夫人』は一方的に素材を引き継ぐだけではない。以下に挙げるような、医師であり、かつ小松原の友人で

ある酒田の言葉は、死後の世界と正反対の方向を向いている。

● 医師の友達は頼母しからう。些と処方外の療治だがね、同じ葡萄酒でも薬局で喇叭を極めると、何となく難有味が違つて、自ら精神が爽快になります。（八）

● しかし其にしても余な怯え方だ。夢を見て通出すなんざ、苟も男子たるべきものが……と云つて罵倒するわけぢやないが、些と確乎しないかい。串戯ぢやない、病気になる。

そんなのが高じると、何も餅屋がつて、此処で病名は申さんがね、起きて居る真昼間でも目に見えるやうになる。それ、現在目に見えて、其処に居るから、口も利くだらう、声も懸けようではないか。傍から見ると、直ぐに最うキの字だぜ、恐るべし、恐るべし。（八）

医師の視線は、「精神」への療治を言い、小松原の様子を茶化しながらも「病氣」「キの字」という言葉で形容し、小松原の様子が、ある異常性を帯びていることを指摘する。

さらには、小松原自身が診察室への何者かの訪れを、自身に起こりつつある異常としてとらえていたと思われる。

● カタリとも言はず……剩へ西洋間の、犇とあり、寂として、芬と、脳へ染る、強い、湿つばい、重くるしい葉の匂が、形ある箔のやうに颯と来て、時にヒイヤリと寝台を包む。（二）

● 且つ現から我に返つた、咄嗟には、内の細君で……返事

をしたが、慫の通り、続いて些とも音沙汰のないの思へ。対手は何でも、小松原自分の目には、皆胸にある、其の人の傍に見えるのかも知れぬ。(二三)

●「こりや、何うかして居るな。」

現と幻との見境さへ附きかねた。其の上、寒気はする、頭は重し、いや、耐らぬほど体が怠い。夜が明けたら、主人の「診を煩はさう」までは心着いたが、先刻より、今は起直る力がない。(五)

ここでは、「脳」への刺激、「頭」の重さが意識されているし、「胸にある、其の人の傍」が小松原の「目」に見えてゐるだけではないか、という疑いまでも抱いている。

鏡花作品において登場人物の「神経」「精神」の鋭敏さが幻視体験と結びつくことは、次のような例により理解できる。

●いつでもあの翼の生えたうつくしい人をたづねあぐむ、

其屋のうち精神の疲労ないうちは可いんだけど、度が過ぎて、そんなに晩になると、いつも、かう滅入つてしまつて、何だか、人に離れたやうな、世間に遠ざかつたやうな気がするので、心細くもあり、裏悲しくもあり、覚束ないやうでもあり、恐しいやうでもある。嫌な心持だ、嫌な心持だ。

早く帰らうとしたけれど、気が重くなつて、其癖神経は鋭くなつて、それで居てひとりであくびが出た。あれ！赤い口をあいたんだと、自分でさうおもつて、吃驚し

た。(中略)

ふるへながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身軀を見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。(「化鳥」、十二／明治三十年四月)

●此の上で又た立停つて前途を見ながら、由井ヶ浜までは、未だ三町ばかりあると、つくぐ然う考へた。三町は蓋し遠い道ではないが、身体も精神も共に太く疲れて居たからで。(中略)

何か、自分は世の中の一切のものに、現在、慫く、悄然、夜露で重ツくるしい、白地の浴衣の、しほたれた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ浜へ通ずる砂道を辿ることを、見られてはならぬ、知られてはならぬ、氣取られてはならぬといふやうな思であるのに、まあ！廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝつた杉の葉も、百姓屋の土間に据ゑてある粉挽白も、皆目を以て、じろじろ睨めるやうで、身の置処ないまでに、右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おどくくして、其癖、駆け出さうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありツたけの遅さで、汗になりながら、人家のある処をすり抜けて、やうく、石地藏の立つ処。(『星あかり』／明治三十一年八月)

作中人物の体験が理屈では説明できないものであると同時に、「神經」の作用によつて見せられるものであることは否定できない。「神經」の鋭さや疲労は、作中人物をそうした体験に近接させたり、作中人物の体験によつて引き起こされたりする。

酒田や小松原が診察室での出来事を「神經」作用の見せるものと考えことはむしろ自然であつただろう。発端は診察室への何者かの訪れにあつたとしても、その後に見たものは小松原の内側で發展拡大した光景だとも言えるのである。

目の前にあるものが小松原に別の見え方を示し始める様子は、具体的に確認することができる。例えば、嬰兒や蝮の標本に目をやるときである。小松原は「今見た女の顔は……何に憑いて露れたらう。(二三)」と考えているうちに、「何処を、何を開けて、と云つたんだらう(同)」と新たな疑問を生じる。そこから、「嬰兒の酒精に浸けたの(同)」や「最一つの瓶には蝮が居た(同)」のように身近にあつたものが原因かのように思われ出し、蝮に至つては「封じ目突出る勢(同)」とまで思われ出す。

●中にも件の長物などは、恠る夜更に、兎もすると、人の眠を驚かして、

「開けて下さい。」

を遣りかねまい、と独りで拵へて、独りで苦笑した。(三)そして遂には、原因を「独りで拵え」てしまうような状態

に陥る。直後、白骨の標本へ目を向ければ、この白骨が「夢を驚かした本尊(四)」と思う。一連の思考を並べると、白骨から現れた診察室の幻影も、小松原自身の中で生み出されたに過ぎないようである。

だが、小松原が白骨を幻影の原因と考えるようになると、幻影の姿は一層活発に動き回り始める。「其実は蔽が見えるのでもなく、勿論揺れるのでもない、臆病眼が震へるのを、見定めようと思つた(四)」(熟と見ると、唯矢張白い(五))などと、そこにある物が白骨に掛けてある白い蔽であることは分かつている。それでも小松原は女性の姿を見ってしまうのである。むしろ白骨が幻影の原因であると発見してしまつたために、逆に白い蔽が女性の姿に見えてくるのである。

酒田は茶化そうとしながら、小松原の状態をみごとに言い当ててしまつてもいた。だから彼の言葉は茶化そうとすればするほど、逆に「神經」質な小松原を浮き彫りにしてしまう。

●其氣でお膳に向つた日にや、お汁の湯氣が濛々と立騰ると、是が毒のある霧になる、其処で咽死に死にかねませんな。(九)

このような酒田の一言でさえも、小松原の一日の体験と照らし合わせれば冗談ではなくなる。次のような食事の際の出来事が思い浮かんでしまうからである。

●一風颯と——田舎は是が馳走と云ふ、青田の風が簾を吹いて、水の薫が芳とした時、——膳上の冷奴豆腐の鉢

の中へ、其の骨の何の辺かが、薄りと浮いて出た。(四)

こうした酒田の言葉に即して見れば、蒼沼に現れたお房にしても、小松原の「神経」作用の生み出すものと考えることが出来る。例えば、お房は小松原の手を引こうとするが、この手を引くという行為は三年前の事故の日、小松原が何度も試みたものであった。

●(お手をお取り申しませうかね。)

と一睽離れて居て云ふと、

(是非、何うぞ。)

なんて笑ひながら、ま、何うにか通つたんだつけ。(十

五)

●小松原は齒を噛んで言洪つたが、

(先方でも、手を出した……其を曳かうと思つた時……

私はぎよつとした。(十六)

●(可いの、貴下、婦は最期まで、殿方が頼りです、さ、

連れて行つて！)

と縋つた手を、緊乎と取合つた。(十九)

三年前には、手を引くことは、はじめは冗談として言つたことであつたが、水がせり上がってくるにつれて徐々に緊迫感を増し、遂には本当に手を引くことになるという形で実現する。何度も繰り返されながら徐々に二人の距離が近付いていることを手を引く行為は示していたのである。その手を引く側と引かれる側が逆転してお房は蒼沼で手を差し出す。

●「今夜は私が、」

すつと跨ぐ、色が、紫に奪はれて、杜若に裾が消えたが、花から抜ける捌いた裳が、橋の向うで納まると、直ぐに此方へ向替へて、

「手を引いて上げませう。」

嫋娜に出されたので、つい其の、伸せば遠く、手を取られる。其手が消えたさうに我を忘れて、可憐い薫に包まれた。(二十七)

それだけでなくとも蒼沼に現れたお房の言動は、小松原の思い出や記憶と都合良く重なりすぎる。お房は小松原に対し、現在の彼女の境遇を説明するが、そのときの「貴下が昨日、お医師様の許へおいでなすつた事(二十六)」「今隠れて居る百姓屋(同)」「此の沼の白骨も、爾時私の許で聞いて、あの方が此処へ来て拾つて行つた(同)」等という説明は、小松原が知っていること、酒田の家で聞かされたことと大して変わりが無い。正吉を「無理遣りに一人帰して(二十五)」、小松原は「独になつて、思ふ随、胸にたゝんだ空想に耽らうと(同)」していたという状況からは、蒼沼のお房の言動と小松原の記憶とが重なることが、両者の密接な結びつきとして浮かび上がるのである。

医師である酒田の視線は、小松原の見ているものを相対化して心理的要因という方向からの解釈を促してはいる。しかし、作品は以下のように閉じられる。

●……小松原は、俯向けに蒼沼に落ちた処を、帰宅のほどが遅いので、医師が見せに寄越した、正吉に救はれた。車夫は沼の隅の物音に、提灯を差出したが、芭蕉の森に白刃が走る月影に恐をなして、暫時様子を見て居たと言ふ。

小松原が恢復して、此の話をした時、医学士は盃を挙げと言つた。

「昔だと、仏門に入る処だが、君は哲学を学つとる人だから、其にも及ぶまい。しかし、蒼沼は可怪しいな。」(二十七)

小松原がお房と出会つた場に居合わせたはずの正吉は、お房の姿を見ていない。正吉が見たのは「芭蕉の森」で一人「白刃」を振る小松原の姿である。そして酒田は「蒼沼は可怪しい」と述べているものの、「可怪しい」のはお房の姿自体ではなく、むしろそれを見せた「蒼沼」に向けられる。この酒田の態度には、「蒼沼」の不思議さを認めざるを得ない医師の姿が現れており、「神経」の作用という解釈の限界をあからさまにしているのである。診察室に現れた三匹の魑を見て、酒田は「嘸また蒼沼から、迎に來たと言ふだらうなあ。(二十二)」と洩らすことしかできなかった。

四

見てきたように、小松原が内に抱えていた光景が浮かび上がる場所としての蒼沼を見出すことは一見不自然ではないように思われる。先行研究においても、『沼夫人』の「水」が無意識や眠りと密接に関係しているとする論考は多い⁽⁸⁾。しかし、蒼沼の上のお房の姿を小松原の内側から浮かび上がった光景ととらえようとしても、とらえ切れない部分が残ることは、酒田という登場人物が示した通りである。そこで、今一度「水」に注目し、小松原の内面と「水」の関係を再考する。

本作品では「水」は、小松原の夢、三年前の汎水、蒼沼と、三度繰り返されていた。

●何時頃からかは能く分らんが、床に入つて、可心持に、すつと足を伸す、背が浮いて、他愛なく憊う、其の華胥の国とか云ふ、其処へだ——引入れられさうになると、何の樹か知らないが、萌黄色の葉の茂つたのが、上へかゝつて、其の樺色の根を静に洗ふ。藍がかつた水の流が、緩く畝つて、前後の霞んだ処が、枕からかけて、睫の上へ、自分と何かの境目へ露れる。……

ト其の樹の下に、箒か何か手に持つて、まあ、膝ぐらゐるな処まで、其の水へ入つて、そつと、目高か鮎か、掬つてる小児がある。其奴が自分で。(中略)其の辺は判然しないが、何でも、すつと陽炎が絡る形に、其の水の

増す内が、何とも言へない可い心地で、自分の背中か、其の小児の脚か、其に連れて雲を踏むらしく躍上ると、土手の上で、——此処が可訝しい——足の白い、綺麗な棲をしつとりと、水とすれぐに内端に搔込んで、一人美人がゝむ、と其と自分が並ぶんで……此処まで来ると最う恍惚……(十一)

小松原は夢の中で水に包まれ「華胥の国」という理想の世界を感じている。それと同様に、お房と居ることは、容易に「蓬莱の島」にでも居るやうな心持のする時(十二)や、「天の端を、ちらく白帆も行きさう(十四)」という感情を呼び起こす。小松原には理想の光景が浮かび上がるのである。その理由は、汎水の中をお房とさまよう間、小松原は何度となくお房の姿を見ては、夢の中の女性を思い出していることから明らかである。

●直ぐに其は消えたけれど、今の其の棲はづれの色合は、何うやら水際に足を白く、すらりと立つた姿に見えたが……(十二)

●薄り路へ被つた水を踏んで、其の濡色へ真白に映つて、蹴出し棲の搦んだのが、私と並んで立つた姿——そつくり何時見る、座敷の額の画に覚えのあるやうな有様だつた——はてな、夢か知らん……と恍惚となつた。(十五)

●路も何うやら広いから、尚ほ力になる。押並んで急いだがね。浅くて一面だから、見た処は沼の真中へ立つた姿

で、何だか幻の中を行く、天の川でも渡るやうで、爾時ふと又美しい色が、薄濁つた水に映つた——(十六)

小松原は何度も、水に映るお房の「白」い「足」を見ている。夢の中の女性も「足の白い」ことが印象に残っていた。つまり、汎水の中という危機的な状況の中でも、小松原には理想の世界へと導く「水」に見えているのである。夢の中に見た一人の美人、この女性をいつしかお房に求めるようになっていたことは言うまでもない。危機的な状況に陥つてもなお、夢の中の理想の水と女性を思い浮かべることは、汎水に阻まれて帰ることができず辿り着いた塵塚でお房の髪に触れたときに言つた言葉によくあらわれている。

●爾時ふつと又、棲の水に映るのが、薄彩色して目に見えたが、其ならば、夢にならう、夢ならば、此処で覚める！(十九)

触れたのはお房の髪であり、水に映るのもお房の足であつた。小松原は、その光景が夢の中のものであるから覚めるはずだと思わず口にした。ここには、お房と夢の中の女性とを同一視する潜在意識が垣間見える。汎水の中は、お房と共に歩むことで夢の再現と思えたのである。

しかし、この「水」は、小松原とお房の居る塵塚に理想の光景を再現させる訳ではない。そこは、むしろ地獄の光景が広がる場所だつた。

●(我慢なさい。こんな事をして居ちや、生命にも障りま

せう。血の池でも針の山でも構はず駈出して行つて支度して迎に来ます。」(十九)

●(ぢや、惡魔に攫はれたと、断念めて、目を瞑つて、覺悟をして……)(十九)

●氣が付いた時は、真蒼な何かの灯で、がつくりとなつて、人に抱へられてゐる、あの人の姿を一目見たんだがね、衣を脱がしてあつた、唯一束ねの滑かな雪で、前髪と思ふのが、乱れかゝつて、唯其の鼻筋の通つた横顔を見ればかり……乳の辺に血が染んだ、——此の方とても、御多分には漏れぬ、応挙が描いた七難の図にある通り。まだ口も利けない処を、別々に運ばれた、それが見納め。(十九)

しかし、白骨を持つて蒼沼へ向かうとき、三年前には地獄の光景とも思へた「水」の様相が一変している。小松原は昨晩よりも強く、お房への恋心を意識しているのだが、その為か蒼沼はもう一度「神仙の園」として意識されているのである。

●一夜の縁のみならず、其処は、自分とあの人とが為に浮名を流した、浜田の水の源ぞと聞くからに、顔を知らぬ許婚に初めて逢ひに行く気もすれば、神仙の園へ招待されたやうでもあつて、いざ、立出づる門口から、早や天の一方に、蒼沼の名にし負ふ、緑の池の水の色、峰続きの松の梢に、髻髻として瑠璃を湛へる。(二十二)

●此辺……何処かで何の鳥か一つ鳴出した。何、正体を見れば、閑古鳥にしろ、直其処等の樹の枝か葉隠れに、翼を揺込んだのが、けろりとした目で、閑に任かして、退屈まぎれに独言を言つて居るのであらうけれども、心あつて聞く者が、其の境に臨むと、山から谷、穴の中の蟻までが耳を澄ます、微妙な天樂である如く、唳々として調べ奏でる。(二十三)

三年前の汎水の「水」と同じく、蒼沼がまるで理想の光景を浮かべてくれる場所であるかのように思い始めているのである。小松原は夢見る樂園の光景と、地獄の光景の間を往還していると言える。

そして、蒼沼の「水」はまたしても思うような場所としては現れて来ない。小松原が思い描く理想の光景、夢の光景と、眼前にある蒼沼には大きな隔たりがある。蒼沼はあの世の入り口としか見えないのである。

●「卑怯だ、此奴！ 始から其は求めぬ誓であつた。又其を求むる位なら、何故、行方も知れず捉ふる影なき其の人を、恠くまで慕ふ。忘れられぬは其の霊であらう。……其の霊は、其処にある、現在骨まである。何が、何が不足で飛込めない。

肉身か、或は其もある。沼の水は、即ち骨を包む膚、溺れて水を吸ふは、尚ほ其の人の唇に触れるに違はん！」
入れ、入れ、入れ、さあくくくく、と水が引き引き、

ざわざわと蘆を誘つて、沼の真中へ引寄せる。(二十五)
沼が求めているのは死である。しかし、小松原は沼の中へ入水することで命を落とし、代償としてお房の傍へ辿り着くことを「猶予ふ(二十五)」。そうするうち、「余りの事に、此処へ来るは今日には限らないと思切つて、はじめて悚然として、帰らうとして、骨を送つた船の漾ふ処を視(同)」め、翡翠を見つける。

●其を恁う視めた時、平時とろくくと、眠りかけの、あの草の上、樹の下に、美しい色の水を見る、描いたる如き夢幻の境、前世か、後世か、或処の一面の絵の景色が、彩色した影の如くに浮んだので、あゝ、此のまゝ此処へ寝るかも知れない。(二十六)

蒼沼にお房の姿が現れる瞬間、小松原は夢の理想の国の側を思い浮かべ、再び「一面の絵」のようにお房を見つけている。この瞬間、夢の中に見る理想の光景と女性とを求めていた小松原の心理が、蒼沼の上にお房の姿となつて結晶したかに見える。だが、それは小松原が沼の死への誘いに従わない決断をしようとすると同時に、骨を鎮めた場所から起こつたのである。

白骨をお房と信じる小松原が、数々の怪しい出来事を彼女の呼びかけと信じたのは無理もない。しかし、原点となつた理想の「水」は小松原の前には一度も現出しなかつたのである。むしろ、理想に反して地獄の光景を見せ、その底に引き

込もうとする沼の意志があつた。蒼沼の呼び声は、三年前「何に誘はれて出たんだか(十二)」分からず、それでも水に揺られる蘆が「光来々々を極めてる(十六)」ということ自体、既に水底への誘いであつたと考えさせる。

つまり、小松原の抱く夢の理想の世界の「水」と、蒼沼のあの世の入り口としての「水」には隔たりがあり解消しない。小松原が夢を希求すること、蒼沼の誘いとが別々のまま、作品は展開していたのである。

五

蒼沼に現れたお房は、小松原に対して「立二さん(二十六)」「立さん(同)」と呼びかけるが、三年前の思い出の中、小松原はそのような呼ばれ方をしたとは述べていない。三年前のお房と蒼沼のお房とは、明確に異なるものを感じさせる呼び方をしている。思い出が反映したとすれば、「小松原さん(十五)」や「貴下(十九)」が自然である。では、蒼沼に現れているお房とは何者であつたのか。沼の呼び声とはどのような関係しているのか。

小松原でさえ自身の「神経」の異常だと考えた診察室への何者かの訪れ、それを聞いてすぐに「あの御骨だつて、水に縁があるんですもの。(二十一)」と言ひ出したのは、酒田の妻が最初であつた。もちろん、以前に「話声がするの、足音

が聞こえるの（二十）」ということを聞いていたためだが、酒田の妻は診察室に小松原が寝る際にも「骸骨さんの方から夜中に出掛けますとなりません。……婦のだつて、言ひますから。（二）」と言っている。酒田の妻の言動が、小松原が白骨をお房だと信じ込む過程の一端を担っていたと言える。

●此の腰の物は、魔除けに、と云ふ細君の心添で。細君は、白骨も戻すと極り、夜が明けると、ばつと朝露に開いた風情に元氣になつて、洗面の世話をしながら、縁側で、向うの峰を見て顔を洗ふ小松原に、

「昨晚はお楽しみ……何故つて。まあ、憎らしい。奥さんが逢ひに来らつしやつたではありませんか。」

など遣つたものだが、敢て是は冷評したのではない。其証拠には、小松原と一足違に内を出て、女子扇と御経料を帯に挟んで、じりく／＼と蟬の鳴く路を、某寺へ。供養のため——（二十二）

酒田の妻がどこまで本氣であつたのか、はかり知ることはできないが、同じ女性の共感を見逃すことはできない。

蒼沼で小松原はお房に言われるまま芭蕉の葉を切払う。道に背いても女性に應えるのが男性だと、小松原は意を決し「道教ふる仙人（二十七）」のように見えた芭蕉と対峙したのである。

●生れて以来、かよわき此の女性に対して、男性の意氣と力を未だ嘗て一度も為に露はし得た覺がない。腑效なさ

も其のドン詰に……

しや！ 要こそあれ。（二十七）

お房が小松原を思つていたかどうかは明らかではない。「貴下、婦は最期まで、殿方が頼りです（十九）」というのが唯一、小松原に運命を託した言葉だつた。「婦」であることが、小松原を頼らせたのである。

小松原が救われた結末を考えると、このような男性、女性に一般化された感情は注目に値する。

●棲取りながら、其処へ来て、其の人が肩を並べた。白刃を落して、其の時腕をさすつて憩ふ、小松原の手を取つて、

「あゝ、嬉しい。」

と山の端出でたる月に向つて、心ゆくばかり打仰いだ。背撓み、胸の反るまで、影を飲み光を吸ふやう、二つ三つ息を引くと、見る／＼衣の上へ膚が透き、眞白な乳が膨らむは、輝く玉が入ると見えて、肩を伝ひ、腕を繞り、遍く身内の血と一所に、月の光が行通れば、晃々と裳が揺れて、両の足の爪先に、美しい綾が立ち、月が小波を渡るやうに、滑かに襷袢を打つた。（二十七）

小松原は、お房に手を引かれ、沼底へと入水するところであつた。しかし、月明かりの中へお房の姿は消えてしまい、小松原は正吉に救われる。沼へ入り命を落とすことへの迷いを見せたとき、お房の姿が現れたことからすれば、彼女は沼

底へ小松原を引き込む意志はあつたろう。かつてお房は女性であるために小松原を頼らなければならなかった。その小松原が男性の「意気と力」を見せてくれたからこそ、お房は「あゝ、嬉しい。」という言葉とともに翻意したのである。

白骨は「婦の」であることだけがはつきりしており、酒田は「其の令夫人の骨ぢやない（二十）」と言ひ、小松原は「けれども、婦のだと言ふぢやないか。何年経つたんだか、幾十年過ぎたんだか、知れないが、婦には変りはなからう。（同）」と返す。お房の骨だとは確定しない。だとすれば、沼に沈んでいるのは女性一般の思いとした方がよい。小松原が蒼沼で向かい合っているのは、お房も含め、この世では果たせなかった思いを抱き、あの世へと男性を導く女性たち一般なのである。男性として女性に応える姿勢が小松原を救つた。小松原にとっては白骨はお房であり、芭蕉を切るという行為はお房に対する恋心にとらせた行動ではあつたが、その純粋な感情が、彼女らがこの世に残した未練を解消したのである。

おわりに

杜若咲く沼に現れる女性（お房）には、謡曲『杜若』に登場する杜若の精からの摂取を見ることが出来る。友人の酒田の言説に従えば、小松原の心理作用を原因として蒼沼の怪は説明ができそうであるし、またそう考えられる様子も確認で

きた。しかし、その枠では囲い切れない事象を発生させながら『沼夫人』は展開している。小松原は夢の中の女性とお房とを重ねあわせながら、蒼沼にお房が現れたとき夢の中のようない理想の光景を感じている。しかし、内面の世界に遊んでいたと考えてはなるまい。また単にお房の幽霊に遭つていた訳でもないだろう。それでは、沼が引き入れようと呼び声をあげ、沼底へ誘う理由が分からない。お房の姿を形作っているのは、この世で果たせなかった女性たちの思いの集積なのである。それに応えようとする小松原の姿勢こそが、お房の「嬉しい」という一言を呼び起こし、彼女たちの魂を鎮めるのである。

鏡花作品の怪に心理的要因を見出すことは必要だが、それのみが全てではない。本作品は、怪異を心理的要因に帰する人物たちを配しているが、同時に彼らの証言ではかき消すことのできない死者との対話を描く。そうした展開に注目すれば、怪異の裏側に広がる世界——『沼夫人』においては蒼沼の底に起因する——が明らかに広がっていることが再認識されるはずである。

注

- (1) 村松定孝「鏡花小説・戯曲解題 卷十一（六）沼夫人」（『泉鏡花事典』／有精堂／昭和五十七年三月）
(2) 笠原伸夫「逗子の幻想地誌」（『評伝 泉鏡花』／白地社／平

成七年一月)

(3) 高田衛「夢と山姫幻想の系譜——鏡花への私注——」(『文学』第五十一巻第六号／岩波書店／昭和五十八年六月、脇明子「無意識の水」(『増補幻想の論理』／沖積舎／平成四年十二月)、橘正典「美醜の始源・叛乱の始源」(『鏡花変化帖』／国書刊行会／平成十四年五月) など

(4) 謡曲『杜若』の引用は、『謡曲百番』(『新日本古典文学大系57』／岩波書店／平成十年三月)に拠り、節の楽型、ルビについては省略した。以下の謡曲『杜若』の引用も全て同じである。

(5) 三品理絵「『草迷宮』における歌絵の趣向——見立て(武蔵野)の世界」(『近世と近代の通廊』／神戸大学文芸思想史研究会編／双文社／平成十三年二月)に『草迷宮』(明治四十一年一月)を中心として「杜若咲くハツ橋」と江戸絵画の関連性が指摘されている。また、「泉鏡花と近世絵画の意匠——文様の想像力の形成と展開——」(『比較文学』第四十六巻／日本比較文学会／平

成十六年三月)では、『草迷宮』での「杜若」を含め、以後の鏡花作品において近世絵画の意匠が取り込まれる過程が指摘されている。

(6) 村松定孝「泉鏡花研究余録——「わが戀は人とする沼の花菖蒲」考」(『學苑』／昭和女子大学近代文化研究所／昭和五十一年五月)

(7) 吉村博任「菖蒲幻想——鏡花の言語空間について——」(『鏡花研究』第五巻／石川近代文学館／昭和五十五年五月)

(8) 注(3)に同じ。

【付記】鏡花作品の引用は全て『鏡花全集』第二刷(岩波書店／昭和四十八年十一月／昭和五十一年三月)に拠った。全ての引用について、漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省略した。引用文の傍線は全て論者の付したものである。

(にしおもとのぶ／本学大学院博士後期課程)